



Title	札幌農学校に於ける人文科学系教化と農業経済学の端諸
Author(s)	大崎, 恵治; OSAKI, Keiji
Citation	北海道大学農経論叢, 28, 47-69
Issue Date	1972-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10879">https://hdl.handle.net/2115/10879</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	28_p47-69.pdf



# 札幌農学校に於ける人文科学系教科と 農業経済学の端緒

大 崎 恵 治

## 目 次

I 問題意識	47
1 社会人文教科	47
2 史料	50
II 検 討	50
1. 開拓使時代の教科	50
(イ) クラーク	50
(ロ) カッター	50
(ハ) サンマース	55
2. 道庁時代の政策変化と札幌農学校の教科	56
(イ) 制度的変化	56
(ロ) 社会人文教科	59
3. 開拓使廃止後の札幌農学校卒業生の「職業と学問」 —内村鑑三と新渡戸稲造の場合—	59
III 結 語	64

## I 問題意識

### 1 社会人文教科

明治9年から明治40年に至る約30年間の札幌農学校の教科を扱う場合、その特徴をどのように把握するかについては、取扱時期別に、或いは学問系別に多様な視角が可能であるように思われる。それ程、教科の種別が多岐にわたっていたし、又学問的内容領域も広範であったと云えよう。その場合、教科の広範さそのものが「特徴」だと考えられないこともないが、学問の専門分化史の側面からみれば、分化以前の学校の教科にみられる共通の特色であり、札幌農学校の場合だけがその例外であるとは考えられない。問題は、その包括的な教科からどのように専門化したかが重要であり、ここでは、設立当初の札幌農学校教科のうちから社会人文系教科を特にくり出し、それを農業経済につながる経路に置いて考えてみようとした。その理由は、農学系とは別の文科系農業経済学が札幌農学校の個性的な学問系の一つだと考えられるからである。

1) 「日米文化交渉史4」384p. 384p.

ところで札幌農学校の個性と云えば、クラーク (W. S. Clark) によってもたらされた「キリスト教教育」と、校名にかかわる「米国農学」とが挙げられなくてはならない筈であるが、前者が人文系教科と密接不離であることは後述するとしても、後者の農学の場合は、専門学としての個性内容必ずしも明確ではない。先ずそれは、単純に駒場農学校の「ドイツ農学」に対比された用語とも考えられる。<sup>2)</sup> 駒場農学校は、設立当初英国農学 (英人教師) を採用して、農学・農芸化学・獣医の三科による専門学科制をもって発足し、明治14年頃から次第に「ドイツ農学」をその内容とするに至っている。従って、駒場農学校の農学が「ドイツ農学」とされるのに異論はないが、札幌農学校の場合は、農学の教科のウェイトは非農学教科に比べて意外に低く、専門学としての農学を内容とするには至っていないと云えよう。札幌農学校の米国農学とは、アメリカの農学校制度、或いは日本の伝統農業を否定する意味での「アメリカ農業とその技術」そのもの、更に云えば米人教師によって教えられた諸教科の総体を意味するにすぎないとも考えられ、農学を中心に教科が編成されたというよりは、その逆に農学が部分的に付加されているという感じがしないでもない。

そこで、農学の枠を外して教科の性格を取り扱おうとすれば、自然科学と「それ以外の教科」の二分法が考えられる。然し、その場合の「自然科学以外の教科」には、体操 (physical culture)、練兵 (military drill) 等が含まれ、又「自然科学」の中にも、所謂専門学と見做される産業的実用学以外の教養的な自然科学 (scientific knowledge) とが混在している。その意味では、札幌農学校の自然科学を特徴づける際に使用されてきた<sup>3)</sup> 「産業的科学」、「実用自然科学」、もっと包括的である<sup>4)</sup> 「北海道開拓に必要な学科」等の従来の用語、或いは「人格教育教科」という用語にしても、札幌農学校の教科の特徴を表現しているとは云えない。教科の理解は教育理念に関係させて始めて可能であると考えられる。

教育理念に関して云えば、従来農学校制度とその農学に関連してしばしばと<sup>5)</sup> りあげられてきたマサチューセッツ州立農科大学との類似性が問題になることは

2) 「農学事始め」安藤圓秀, 116p. 農学のマックス・フェスカ 明治15年11月15日来日, 農芸化学のオスカー・ケルネル 明治16年11月4日来日。

3) 「内村鑑三と現代」8p (矢内原忠雄)。

4) 「時計台の鐘」20p, (高岡熊雄)。

5) State Agricultural College at Amherst 以下、本稿ではマサチューセッツ・カレッジと略称してアマースト・カレッジと区別する。

勿論であるが、それ以上にクラークと内村鑑三の母校である<sup>6)</sup>アマースト・カレッジとの教育的類似性が重要である。その「古典研究」・「自然科学」・「宗教性」、及教育上の三本の柱である「知育」・「体育」・「徳育」が注目される。更に専門学に関して言えば、札幌農学校教授となったマサチューセッツ農科大学出身者が、専門的資格をドイツ或いはアメリカの他の有名大学で取得していることを考え併せなければならない。とすれば、アメリカ的な個性というよりは、むしろヨーロッパの影響側面が注目され、その場合、教科と教授内容とが区分して取扱われなくてはならないことは云うまでもない。

以上のように考えて、社会人文教科の検討を進めることが小論での第一の課題であるが、第二の課題は、人文・社会科学の要素と宗教・教育理念との分岐の問題を取扱うことである。第一課題は、直接史料によることとしたが、第二課題では、内村鑑三と新渡戸稲造を象徴的に把えて比較考察をすることとした。

新渡戸稲造をとりあげたのは、農業経済学の学父として重視したことは勿論であるが、又札幌農学校の社会人文教科の系統を担う代表的先覚として内村鑑三の自然科学系に對置させてみた。というのは、両者は、札幌農学校に於けるキリスト者として、思想的同一地点から出発して卒業後相異の道を選んだことであり、その場合の両者の「思想的分岐点とその背景」について、従来は、専ら宗教と個性、(パーソナリティー)にその理由を見出してきたように受取れるからである。然しここでは、「学問と職業」にウエイトを置いて考え、又新渡戸稲造を通してみた場合の農業経済学の端緒が文科系科学に、つまりここで云う「社会人文教科と宗教」につながっていた点を観めようとしたことである。従って、かなり仮定的独断的な試みであることを断っておきたい。

## 2 史料

札幌農学校の教科そのものを知るためには、明治9年1月から明治13年12月に至る5年度の「各年報」と明治14年1月より明治19年12月までを一括して扱われた「第6年報」があり、以上の6冊の年報(外人教師によって編まれたものである)につづいて明治20年以降は、現在の北海道大学一覽に連なる「札幌農学校一覽」がある。直接的には、それらが検討の史料になっている。

---

6) Amherst College については次を参照。「アマーストに学んだ日本人」手塚竜磨, 昭和32年アメリカ文化センター主催, 第10回研究会談話。

また、公式の「学校史」としては、大正15年出版の「北海道大学沿革史」(創基五十年記念)と昭和40年出版の「北海道大学八十年史」があって、「年報」「一覽」と併せて重要な史料と考えるが、ここでは、時代的に溯行して、明治30年、札幌農学校学芸会で編まれた「札幌農学校」と、その基礎となった明治26年新渡戸稲造著の「<sup>7)</sup>The Imperial Agricultural college of Sapporo, Japan」を主として取り扱った。特に、新渡戸著は、明治26年までの「札幌農学校史」関係各書の原典となっているのではないかと考えられ、また、学芸会編とは視角を異にしていると思われるので特に重視した。

新渡戸稲造と内村鑑三との関係考察については、内村鑑三の書簡を中心とせざるを得なかったし、新渡戸稲造の場合は原史料よりは伝記、新渡戸稲造研究等を参照するに留まった。内村鑑三については数多くの文献があるが、新渡戸稲造については、最近の全集出版を機に研究関心が高まってきたと云え、内村に比べれば数少ないためでもあった。

## II 検 討

### 1. 開拓使時代の教科

#### (1) クラーク

札幌農学校設立の政策的背景については、「<sup>1)</sup>前回の小論」で若干の考察を試みたが、ここでの小論に關係してそれを要約しておこう。

黒田清隆案では、農・鉱・工産業のための実用科学技術と学問を意図したのに対して、ケブロン案では農業・農学中心の政策であり、実用科学というよりは、農業に関連する高度の自然科学及研究機関を要請していた。

札幌農学校の設立は、大凡ケブロン建言の線に沿うて実現されることになったが、然し黒田案が消滅したわけではない。また、クラークを学校組織者として迎えたことによって、両者とは別な教育理念が輸入されたと考えられる。

クラークの学校計画によると、<sup>2)</sup>自然科学士 (Bachelor of Science) を養成して開拓使のあらゆる部門に役立てることを目的としていた。その場合、社会人文教科及教養的自然科学をほぼ同列に重視していたことは後述するとして、

7) 高倉新一郎、「札幌農学校教授新渡戸稲造」, 北大季刊刊行会「内村鑑三と新渡戸稲造」所載。

1) 拙稿「北海道開拓政策と札幌農学校の設立」農経論叢27集所載。

2) 英文第6年報, 2p。

先づ農学に関してのクラークの側面に触れておきたい。佐藤昌介は<sup>3)</sup>『……(クラークは)自然科学に対しても造詣深く、その得意の学科は植物学と化学であった。農学者でないことは自ら云う所であったけれど、農場の経営に関しては一見識を持って居た……』と述べている、また内村鑑三は、明治18年9月10日クラークに逢って<sup>4)</sup>『…氏は宗教家というよりは、むしろ軍人だ……』と新渡戸宛に書き送っている。更に逢坂信吾「クラーク先生許伝」によると、マサチューセッツ・カレッジ設立の際の設立委員の一人であるハーバード大学動物学教授アガシー(Agassiz)の設立反対の意見がみられる。それはつまり、農学校の農学的内容に関しての反対であり、専門学をもたない農業専門学校設立に反対したのであった。アガシーは、専門学としての「農芸科学」を内容とすることでその反対を撤回している。以上に併せて、クラークがアマースト・カレッジ卒業後、ドイツで鉱物化学を専攻、帰米後、植物生理学の研究に転じたことから考えても、アガシーの云う農芸化学、つまり農学を専門にしたとは考えられず、むしろ内村の云う軍人的な側面と野外授業(out-door exercises)、その他の体育的実習的教科の編成にクラークの特色があったのではないかと考えられる。直接第一年報によってそれを見よう。

農学校に必要とされる諸知識は、次の15項目である。

- (1) 日本文及英文(辨論、討論、英作)。
- (2) 簿記及諸実務。
- (3) 代数・幾何・三角・測量・普通道及鉄道の建設に必須の土木工学・排水灌漑関係。
- (4) 特に諸機械に対する、物理学。
- (5) 天文学。
- (6) 農業と冶金に関する化学。
- (7) 植物学(構造・生理・組織)。
- (8) 動物学。
- (9) 人体比較解剖学及生理学。
- (10) 地質学。

3) 中島九郎「佐藤昌介」, 34p.

4) 内村鑑三日記書簡全集5, 179p. 以下内村書簡と略称する。

5) 同書, 91p.

6) 英文第1年報 41p, Object and Plan of Organization.

- (11) 政治経済。
- (12) 精神学と道徳学。
- (13) 体操。
- (14) 軍事学及戦術。
- (15) 農業と園芸，教育上重要な理論と実際，北海道農家の環境と必需品に関連して常時討論さるべき時事問題。

その15項目を分類してみると。

[自然科学] は，实用自然科学として，(3) 土木，(4) 機械工学，(6) 化学，(15) 農学が考えられ，教養的自然科学 (scientific knowledge) としては (5)，(7)，(8) (9) (10) が考えられる。

[社会人文教科] は，徳育に関して(12)が，体育に関しては(13) (14)が，知育の人文系教科に関しては(1) (2) (11) が考えられて三分される。

以上の分類をもって，明治9年の学科コースについて，週単位の時間数を4年間8学期で通算して各系の相対的關係をみてみると。

[实用自然科学] は，農学19時間，化学30時間，数学と物理45時間であるから合計94時間。

[教養的自然科学] は，天文・地質・動物・人体合計で29時間。

[社会人文教科] は，英語31時間，簿記・経済・倫理12時間，実省練兵37時間で計80時間となっている。

以上から云えることは，全体的に云って实用自然科学のウエイトが異常に少いことである。また，化学・工学・土木・教養的自然科学・英語の夫々の時間数に対して農学の時間が少く，農業実習と練兵の時間が多きことである。前述のアマーストの知育・体育・徳育の教育理念が伺われるが，ここで注目するのは体育面ではなく，徳育と知育に関連する社会人文教科である。その中では，英語の31時間が注目されるが，といて，それを単に語学教育重視と考えることはできない。アマースト・カレッジの古典文学研究の伝統を引くと思われる英文学関係の他，弁舌法 (Elocution)，討論 (Extempore Debate)，英語朗誦 (Original Declamation) が組まれていて，古典教育に合わせて英語での社会的実践活動能力の養成をねらいとしていたことは明白である。英語の教授科目は，第3年報によると，英語及エロキューション，英作文及エロキューション

6) 英文第1年報，45p，付表1参照。

ンが第1年報の英文学に代って基本授業になるが、英文学史・英語朗誦・討論は重要科目として残っている。

英語に関して特に注目されるのは、カッターとサンマースが担当して、農学校というよりも東京大学文学部（英語学科はなかったが）と同程度の高い教育内容が与えられたことである。

以下、札幌農学校教授としての両者について、若干触れておきたい。

(四) John. C. Cutter

明治11年9月23日来校したカッターは生理学者（余は如何にしてキリスト教徒となりしか）獣医学者として知られているが、実は医者であることと、札幌農学校の歴史学の貢献者であることについては案外知られていない。

マサチューセツ農業専門学校略史によると、カッターは明治5年卒（1872）であるから、卒業年次から云えば、クラークと共に来日した、工学の William. Wheeler より一年後輩で、やはりクラークと共に来日した植物学の David. Pearce. Penhallow より一年先輩であった。また農学の William. Penn. Brooks はカッターより3年後輩ということになる。

マサチューセツ・カレッジ卒業後、ハーバード大学(Harvard Medical School)で医学士となり、来学前約一年半をボストン府病院で勤務した。札幌農学校では、解剖・動物・英文学・経済学・獣医学を担当して明治20年1月に及んでいる。

在札期間としては、明治10年より明治21年に至ったブルックスと並んで、最も長期間勤めた外人教授であり、それ故に影響は強く、貢献は高かったと云えよう。

開拓使相談医、学生の健康管理医としての側面も見逃せないが、ここでカッターに注目する点は、英文学・心理学の講義を担当したことであり、そこで歴史学を講じ、新渡戸稲造等を通して人文科学的伝統の先導者としての側面である。第4年報には、カッターの担当の英文学科報告があり、歴史学についての講義内容が詳細に述べられている。

その報告は、第三学年度後期（明治12年1月から7月）と第四学年度前期（明治12年8月より12月）の報告であるが、明治12年1月から7月までは、三年目学生つまり第一期生の後期の「英文学史6時間」・「英作文及エロキュー

7) Brief History of the Massachusetts Agricultural College, Semicentennial 1917 By L. B Caswell, 25p.

ジョン2時間」を受け持ったと考えられる。授業内容は、最初18世紀間に於ける<sup>9)</sup>「歴史上著明ナル事迹の教授ヲ始メ」、その後毎週1時間をこの授業を継続したとある。その目的は、自然科学に用いられない言葉の訓練を兼ねて「英国史上、英文学史上に与えたヨーロッパの風俗、習慣、事実を指摘して記憶を喚起することにあつた」とある。英国社会史を講義したと云えようか。

また、一年目学生には、ヨーロッパの地理・政治・社会に関連して、また1858年に至るまでの現代史に関連して英語を教え、授業に興味と効果と発展をはかったと述べている。

更に、明治12年8月から12月迄は、4年目学生の「心理及論理」の時間（第一期生）を担当して、前半は心理及精神衛生を、後半はヨーロッパ発達史中に示された文明の事実をさぐるために当てたと述べている。その授業の結果として、一層歴史の授業の必要性を痛感させられたとも書かれている。

尚詳細は、直接「英文第4年報」にゆずるとして、心理及論理を歴史学に変化させた他、3年目前期の英語時間数を減じて動物の時間を週3時間から6時間に増加した。つまり開拓使時代に於ける札幌農学校のカリキュラムの二つの変化（心理学及論理学と動物学）をカッターが実施していること、また第3年報で、ホィラーがカッターの教授効果を、<sup>11)</sup>「學術の進歩歴然たり」と述べていることと併せて注目に値する先生であったことが伺われる。

新渡戸稲造が、カッターに大きな信頼をよせていたことは……<sup>12)</sup>氏の学問は他の諸先生に比して遙に右に出でたりき……受持の学科は生理学のみなりしが、教師の不足になりし頃は、歴史・心理・英文学等種々雑多のものを教えられしが……帰舎して検せしこともありしに別に先生の失敗を発見すること能わざりき……」とある通りである。所謂人文科学の内容は先ずカッターによって与えられたと云うべきであろう。

#### ㊦ James Summers

サンマースは、明治6年来日、<sup>13)</sup>開成学校で英文学を講義して、日本で最初にシェクスピアを教えた「お雇い外人」として日本英文学史上著明である。札幌農

9) 和文第4年報, 37p.

10) 英文第4年報, 37p.

11) 和文第3年報, 6p.

12) 松隈俊子「新渡戸稲造」79p, 80p.

13) 「日本の英学百年」, 165p.

学校との関係は、明治13年6月13日からで、来校以前の職歴は多彩で支那滞在の経験があり、英国に於けるキングスカレッジ教授であった。日本でも新潟英語学校・大阪英語学校の教師を歴任していた。

札幌農学校側では、第4年報中で、「日本人の英語授業では効果が上らないこと」が表明されているが、そのためか、第5年報では、「久シク待望セル」サンマースを迎えたとある。とに角、カッターが専門以外の歴史学で教授効果を上げたのに対して、サンマースは本格的な英語教授で貢献したと云ってよく、新渡戸稲造が後年、札幌農学校4ヶ年間に学習した学科のなかで一番役に立ったのは英文学だったと回顧しているほどである。

サンマースは、英語朗誦(Original Declamation)の時間に古文、模範文の暗誦をさせたり、論文作製の為に、Elements of Rhetoric by G. Flon, や Bain の著書を教えたりして語学教育の改善に努めているが、ここで特記すべきことは、明治13年9月から明治13年に至る第5学年度前期に一年目学生を教え、英読・英作の欠陥是正のため、ロードの欧州近世史(Lords Modern History of Europe)を採用していることである。サンマースは、一年目学生が非常に熱心に授業を受けたと、満足の意を表している。

当時の一年生の中には、後年英語で名をなした、頭本元貞・武信芳太郎の名が見え、3期生(当時3年生)の中には、斎藤祥三郎・佐久間信恭が見られる。新渡戸稲造への影響は勿論のこと、歴史学者、地理学者としての内村鑑三や、志賀重昂に対しても、カッターやサンマースの影響少くなかったと云えよう。

また、もっと大きく云うと、カッターとサンマースは、クラークが編成した社会人文教科に、ヨーロッパ的であり歴史学的である「人文系科学の内容」を与えたと、云えないだろうか。然し、残念なことにサンマースは、開拓使廃止後間もなく明治15年6月札幌農学校を辞している。学芸会編「札幌農学校」では、『……英文学及弁舌等が各学年主要の部分を占むるは奇異の感なき能わず……』とあり、又『……次第に其形而上の学問減じ来りて、遂に農学校として其名実相適ふに近からしむるに至りたり……』と表現している。

14) 「お雇い外人」教育・宗教」160p—168p。

## 2. 道庁時代

## (イ) 制度的変化

ところで、新渡戸稲造は、札幌農学校に於けるカリキュラムの第三<sup>1)</sup>の変化として「明治25年の道庁時代」をあげている。この変化は、単にカリキュラムの変化というよりは、明治19年、道庁設立を契機として具体化された北海道開拓の政策転換に伴う札幌農学校の制度的改変を背景としたものであったと考えられる。これに対しての新渡戸稲造の見解は、カメラリスティック (cameralistic) なものから技術学校 (technical instiution) 的なもの変化として捉え、その意味するところを、国家的人材養成機関から、地方的農業的・技術者養成機関への変化と見做している。

たしかに、制度的には、明治20年3月、農・工両学科制に加えて農芸伝習科が附設され、札幌農学校の発展的变化と云えようが、ここで取り扱ってきた「社会人文教科」に限って云えば、それは予科科目に追放されるか、或いは農工的内容に限定されるかのどちらかになったのであり、札幌農学校の人文系教科の伝統は形式的にはこの時に消滅したと考えられるからである。そこで、この場合の道庁の農学政策と札幌農学校の農学との関係について一応の考え方を求めておく必要がある。

この問題は、云うまでもなく大きな課題であり、ここで取り扱う範囲を越えると思われるが、仮に北海道開拓政策を大別して、近代的西欧的な工業 (工場制) の輸入を意図した産業政策 (鉱・工・大農) と小農移民政策とに二分して考えるとすれば、「開拓使時代の官営事業政策」に対置される道庁時代の政策は、「富民誘置政策」としてだけ特徴化されるものではない。官営主義から民営主義への政策変換は国家産業政策の場での転換に伴うものであるが、北海道の場合では、民営事業主義に加えて、欧化産業主義から「移民の促進政策」への政策的重心変化を意味するものであったとも考えられるからである。

道庁行政確立の政策立案者であった、金子堅太郎の北海道三県巡視復命書、明治5年第三百四号布告北海道土地売買規則第六条改正その他の議だけをみても、「開拓使カ経営セン事業」「開拓使ノ農工事業ヲ継続シタル管理局ハ……

1), 2) 新渡戸稲造 The Imperial, Agncultural College, 24p. 25p.

3) 金子子爵談 明治18年北海道巡察及び三県廃止、道庁設置し沿革。

拓地殖民ノ急務ヲ計画スルコト能ハズ」「殖民局ヲ設立シ……外形ノ虚飾ヲ省キ拓地殖民ノ急務ヲ実行スルニ在リ……」とあり、また「……開拓使設立以来官吏華族ノ土地ヲ北海道ニ購求セシ所以ハ……土地ヲ売却シテ一時ニ巨万ノ利ヲ得ント欲スルニ外ナラズ……」。『開墾熱心の移住民』『屯田兵（士族授産）』、『薄資ノ漁民』等の小農保護政策の用語が散見される。

わけでも、「札幌農学校に関する意見」は最も有名なものであるが、要は、「開墾の実」に暗しと云っている通り、小農移民政策への実践性を強調したものであり、「開拓使時代の学的役割」からの変更を迫るものであったと云えよう。

こうして、「実用農学への道」は金子堅太郎によって政策的に用意されたと云えようが、然しそれとは別に札幌農学校それ自体で、内部的に推進されつつあったことも重要である。

ブルックスは、開拓使廃止後の農学の問題に関して次のように述べている。<sup>4)</sup>『……ヨーロッパ及アメリカで実用化された農業の最新の諸方法は全部叙述（講義中）した。然しそのような方法は必ずしも日本に適合するものでないことを明確に認めざるを得ない。どの程度現在条件に適合可能かを明らかにし又同時に日本農業を外国農業水準に高める熱意を表明して（学生）を激励しなければならなかった……。』又カリキュラム改正に関しては、「改正は明治16年に実施した」と報告しているので、第6年報中に示されているカリキュラムは（明治19年）その改正結果だとも考えられる。それによれば、実践性への農学の専門化・分化を意図したものと云える。具体的には、「ドイツ農学への傾斜」であり、「駒場農学の輸入」に他ならなかった。農学の学父とされる第二期生南鷹次郎が、卒業後間もなく駒場農学校に国内留学を命ぜられて獣医学を学んだのを皮切りに、明治20年カッター帰米後の空席には駒場出身の須藤儀衛門が教授となり、農芸化学では、明治22年、やはり駒場出身でケルネルの弟子である吉井豊造がストックブリッジ(H. E. Stock bridge)に代ったことをあげれば充分であろう。また明治19年のカリキュラムの、一年目後期及二年目前期には南鷹次郎の「日本農学」の講義の開設が見られる。その講義の開設の理由は、卒業生の要請によるものだとしている。

4) 第6年報, 2p.

5) 南鷹太郎伝, 34p.

更に英語に関して云えば、明治19年では、一年目前期週5時間、一年目後期週3時の計8時間であり開拓使時代の31時間から大巾減少しているが、一方ドイツ語は明治22年（8学期通算）で17時間となっている。マサチューセッツ・カレッジ出身の教授は、農学のみに限定され、明治21年ブルックスからブリガム（Arthur A. Brigham）に受けつがれたが、明治26年には南鷹次郎に代った。ブリガムはマサチューセッツ農業専門学校出身者ではあるが、卒業後数年間實際農業の経験者であり、学理的であるより実践的な傾向を担っていたと考えられ、実践的農学への基線につながっていたからであろう。

#### (四) 社会人文教科

さてここで、前記英語を除いた社会人文教科の変化を取り扱ってみよう。明治11年をとり、明治19年の場合とを比較すると、討論（Debate）は農業討論（Agricultural Debate）に、簿記（Book-keeping）4時間は農業簿記2時間と農業史及統計（Agricultural History and Statics）2時間に変わり、更に政治経済（Political Economy）4時間に加えて新しく農業経済及地方制度（Agricultural Economy and Rural Law）が登上している。心理及道徳学（Mental and Moral Science）は、心理学及論理学（Mental Science and Logic）・ヨーロッパ政治史等を経過して文明史を内容とする歴史（History）となっている。

明治15年6月サンマースは任期が切れた際、同年10月新渡戸稲造が英文学を引継いだ。然しその期間は一年に留まったし、つづいてカッターが明治20年帰米したので、社会人文教科は、形式的にも内容的にも、ここで消滅したものと考えてよい。明治19年に「農学コース」として新しく登上した教科をあげておくと、農産製造（Home Manufacture and Agricultural Products）農業土木（Agricul Engineering）養蚕（Agriculture and Sericulture）等がある。従って、その後の文部省時代につながる「農学の原型」は、既に明治19年に出来上っていたと考えられ、新渡戸稲造の云う明治24年のカリキュラム上の根本変化とは教養科目（general knowledge）のすべてが予化に移されたところにあるであろう。

7) 付表3参照。

8) 英文第6年報, 5p.

従って社会人文教科の「農学化」と「予科えの追放」について<sup>9)</sup>「合理化、完全化とは程遠いものだ」と、新渡戸稲造が、批判的であったことは、特に強調するまでもないことである。

### 3. 開拓使廃止後の札幌農学校卒業生

開拓使のあらゆる部門に役立つ産業技術者 (Bachelor of science) の養成を目的として特に重視された社会人文教科 (general knowledge) は、カッターやサマースによって高度な内容を与えられ、日本の他の同種の高等教育機関 (駒場農学校・工部大学校) にみられない特色をもったと云えるが、開拓使廃止後はその特色を失ったということになる。その結果、道庁時代になっての卒業生は農学的専門性を確保して或る程度の職域が約束されることになったとは云え、一期生から数年間の卒業生は「学問と職業」の問題をめぐって大きな困難に直面させられた。その辺の事情については、大島正健「クラーク先生とその弟子」に活写されているので省略するが、比較的安定的な職業コースを歩んだのは、宮部金吾 (植物)、渡瀬庄三郎 (動物)、南鷹次郎 (農学) 等小人数に限られ、それ以外は、留学をして再学習をするか、夫々の能力を活用して新しい職域を開拓するかのどちらかの道を余儀なくされたと言って過言ではない。

農業経済学の教授として斯学の先覚となった佐藤昌介、新渡戸稲造にしてもその例外ではなかった。特に新渡戸稲造の場合は、内村鑑三と並んで、又札幌農学校キリスト三人組の一人として、札幌農学校を代表するキリスト者であり、これまで述べてきた札幌農学校の人文系学問の継承的形成者でもある。宗教と学問をめぐる両者の関係をさぐることがここでの課題となる。

内村鑑三は「職業と学問」に関して次のように回想している。<sup>1)</sup>  
『……母校に水産科が創設されたとのニュースに多くの回想にふけりました。自分の期待が、25年待った今日実現されたことを考えるのは、何よりの慰めです。僕の卒業当時にこのような学部が問もなく設けられる見込があったら、僕は未来の教授として学校に残され、決して人をすなどる者にはならなかったことでしょう……』とあり、

『そうすれば、僕の生涯の不幸はドレ程さけ得たことでしょう。また僕の生涯

9) 新渡戸稲造 (The Imperial Agricultural College), 24p.

1) 内村鑑三日記書簡全集 6, 131p, 明治39年2月22日。

はドレ程幸福だったでしょう……』とある。

明治14年7月9日の第二期卒業式に於ける演説で「……温飽に安んずる者に非ず、之より艱難の道に入りぬべし……」と述べて、敢然と社会に入った内村鑑三の明治30年1月万朝報入社までの前半の人生は、開拓使、農商務省、米岡留学・新潟・東京・大阪・熊本・京都・名古屋と各地各所をめぐる求職遍歴であった。その間の全体を流れる内村の課題は、「人生上の生死にかかわる問題」であって、学問と宗教問への期待に悩んだ幸福な期間は、後述するように明治18年9月アマースト・カレッジに入学する直前の2・3ヶ月の間である。

比べて、新渡戸稲造の前半の人生は、札幌農学校学生時代の、「学問と宗教」の悩みから出発したにしても或いは宗教というよりは、「学問と職業」に悩みの中心があったと云えるかも知れない。然も、新渡戸の悩みは内村がアマースト・カレッジに入学する頃までには解消した。周知の通り新渡戸の悩みの解消は、クエーカー宗とカーライルだと云われているがいずれにせよ、内村と新渡戸の思想上の断絶と分岐が、新渡戸の悩みの解消期と平行していることに注目したい。ここではそれを「学問と職業」に焦点をあててみたい。

内村と新渡戸の相違点を一言にして云うと、権力に対する姿勢にあると云えよう。丸山真男の次の一文を掲げると、<sup>2)</sup>『明治の思想史において最も劇的な場景の一つは、自由と民権と平和のわれ人ともに許すチャンピオンたちが二十年代の終りから三十年代にかけて相ついで国家主義と帝国主義の軍門に降って行く姿である……その滔々たる流れを抗しながら、恐らく嘗ての同志の脱落を「プルータス、君もか」という思いをもって見詰めていたのは、万朝報に拠る一団、すなわち幸徳・堺らの社会主義者とキリスト者の中ではただ一人内村鑑三であった。……』とある通り、抽象的心理的に云えば、内村の対決型・非社交性に対して、新渡戸の場合は妥協的社交性に求め、その対決性と妥協性の理由を没落武士出身と上層武士出身の相違性に求めたり、或いは人格心理学上の分析対象としたり、新渡戸の宗派であるフレンド派とアマーストカレッジのピュリタニズムの相違性に求めたり多種多様であるが、ここでは、特に内村が社会科学をしりぞけた面を重視して両者の交渉を辿ってみたい。

札幌農学校学生時代の両者の対立は、「社交性」と「宗教的純粋性」との間で、<sup>3)</sup>或いは「経済学及社会学」と「キリスト教」の間で取りかわされている。

2) 「回想の内村鑑三」鈴木俊郎編，105p。

内村は、世界を精神（宗教）と物質（金銭）の二原的世界で捉え、「経済学と社会学」を物質界に俗する学<sup>4)</sup>、誤れる学問とし、その信奉者を物質至上論者と呼んでいる。そして、宗教と経済学を、和解し難きものと考えた。新渡戸に対して『……君はしばしばジョン・スチュアート・ミルに頼る……いわゆる誤れる学問でそこなわないようにしてくれ給え……』と忠告しているのはその一例にすぎない。新渡戸の場合は読書家であり、学者的であり、英文に特にすぐれているために、入学以来「皇国農業」への使命感から「皇学」・「農学」を求めつつも、学問内容としてはカッターやサンマースの影響をうけて、文学、歴史、経済学、古典に傾倒して行ったとみられる。一方内村の学問的専攻は「水産動物学」であり、経済学・社会学をしりぞけているのであるから両者が対立を深めて行くのは当然であるとしても、共通の精神的場がなかったわけではない。それは貧窮問題であり、社会問題への熱意であった。明治16年上京中の新渡戸宛書簡で『……われわれの宿題である「貧民の実情探求」……』と書いているし、新渡戸の洋行の動機となったといわれる一冊の書がヘンリー・ジョージの「進歩と貧窮」であること、また留学中の内村が『……モンクよ信仰問題と社会問題との双方における君の確信について聞いた時……』と書き送っていること等、内村にあっては、新渡戸との共通性を積極的に求めていたと考えられる。つまり両者の共通基盤はキリスト教人道主義にあったと云えようが、白痴院で内村はその限界を知り、新渡戸の場合は、それを一層進展させるための職業的社会的背景を与えられることになったことが分岐の始点になったと考えたい。

周知の通り、新渡戸に与えられたものは内村によって紹介された「フレンド派集会」であり、佐藤昌介によって与えられた「ドイツ留学と札幌農学校教授」への道であった筈である。その経過は次の通りである。

内村と新渡戸は夫々の理由で明治17年後半前後して渡米した。

先ず新渡戸は、東京大学を中退して歴史・古典文学(ギリシャ)・カーライル・

3) 「余は如何にして基督信徒となりしか」

4) 5) 7) 「内村鑑三日記書簡全集 5」18p, 24p, 19p。

6) 「余は如何にして基督信徒となりしか」194p。

8) 松隈俊子、「新渡戸稲造」88p。

9) 11) 「上記書簡全集 5」57p, 128p (明治18年3月23日)。

10) 松隈俊子「新渡戸稲造」123p,

経済学・社会学・哲学・宗教等多様な知識を内包しつつ明治17年9月30日ペンシルヴェニア州ミードヴィル市に到着、アレゲニー大学に入学、ドイツ語と哲学と論文の修辞法を学んでいる。宣教師ハリスの紹介によるものであった。間もなく、既に在米中であった佐藤昌介のすすめでボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に移ったがそこでは所謂アルバイトをしつつ苦学することになった。ドイツで歴史と経済の勉強をするのが、新渡戸のその折の目的であり、米  
 国留学は媒介的なものと云えるが、明治15年8月札幌農学校を辞して東京大学に入学する際には、目的はアメリカ留学とされている。そのことから云って、新渡戸にあっては宗教的彷徨というよりは、学問的彷徨をつづけていたと考  
 えてよい。内村の場合は、離婚を契機に渡米、ホイットニー博士 (Willis Norton Whitney, ペンシルバニア大学出身) を頼るつもりであったが、不景  
 気で就職難のため、宣教師ハリスの紹介でペンシルベニア州立児童白痴院に勤  
 務することになった。その思想的宗教的彷徨については「余は如何にして基督教徒となりしか」によることとして、ここで内村に注目させられるのは、彼の職業決定に関しての佐藤昌介から (新渡戸経由で) 書簡についてである。

内村の佐藤昌介への返事は、明治18年3月23日新渡戸宛書簡で次のように答えている。

『……僕の生涯の目的は何か。僕にとり答えるにがたい問題である……僕の目的は貧しい人々の友となることだ……自分のパンと住いのことについては断じて考えないことに決心した。……キリストのためならば何でも進んでするつもりである。……その人の多くの才能のうちただ一つに限定してしまうところのあの考え方は偏狭だと僕は思う……佐藤君 (佐藤昌介) が僕について知りたいと言っていることに対する答になっていると思う……』

一方、明治18年1月7日宮部宛書簡で内村は、ペンシルバニア大学入学の機会を待っていると述べていることから、宗教と学問との相剋の最中とも考えられ、その文面は佐藤昌介の進言に対する辞退の手紙ともうけとれないことはないが、少なくともその後は、新渡戸が学問と宗教を分離しつつ夫々を追求しつつ

12) 13) 14) 15) 松隈俊子, 新渡戸稲造 138p, 127p, 139p, 130p。

16) 第6年報, 6p。

17) 東京女子大学「新渡戸稲造研究」40p。

18) 19) 内村鑑三日記書簡全集5 (74p, 104p), 108p。

20) 21) 同上書, 127p, 113p。

あったのに比べて、内村は何人かの進学援助をしりぞけて宗教的实践への道を選んでゐる。

内村の新島襄に対する書簡10通が、明治18年9月アマースト・カレッジに入学するまでの「その間の事情」を伝えるが、ペンシルバニア大学（生物学・医学）とハーバード大学（政治経済学）とアマーストとの交錯に満ちたものであった。内村がアマーストに入ってから、思想上の断絶はいよいよはっきりしてくる。

新渡戸が正式にクエーカー教徒となったのは明治19年12月9日のことであるが、クエーカーの集會に参加したのはもっと早く、明治18年5月頃であったと推察される。モーリス夫人邸の集會は、最初ホイットニーによって内村が紹介され、更に内村が新渡戸に紹介したものであり、従つて、両者は明治18年5月頃以降、そこで度々相會することになった。然し間もなく内村は、明治18年7月15日新島宛書簡で、新渡戸の宗教性に失望の意を表している。

『……………小生はアメリカに来ることによって、あらゆる物一交友・収入・健康を失いました。……太田（新渡戸）には数回会いましたが、大して得るところがありませんでした。小生には、今もつて、彼のキリスト教がわかりません。実のところ、小生はむしろ失望しました。……それにしても、宗教上の問題について彼が明らかに、非常に無関心であることは、小生には説明がつきません。……………』

新渡戸の宗教的無関心が、佐藤昌介<sup>23)</sup>の農商務省御用掛採用と、関連しての新渡戸の人生方向決定にかかわるかどうかを、具体的に解明することはできないが、佐藤昌介<sup>24)</sup>の帰国が明治19年8月であり、その4ヶ月前にドイツ留学が決っていたこと、また新渡戸と内村に対する書簡から推察して、新渡戸の宗教的無関心が必ずしもそれと無縁ではないと云えそうである。明治19年7月5日には、宮部金吾が留学命令を受け、佐藤昌介の帰国と前後して、明治19年9月に米国に到着している。その折内村は明治19年10月6日宮部宛書簡で、次のように述べてゐる。

『……………ボルチモアでモンクに合つてどうであつたか。彼は今ではクエーカー信者になっていることを君は知つたわけだが、懷疑的な彼としては決定的な変

22) 内村鑑三日記書簡全集5, p160。

23) 24) 中島九郎「佐藤昌介」, 56p。

り方である。彼はたびたび僕の変わり易いことに非難するが、しかし僕は彼ほどではない……』

また20年7月27日には、やはり宮部宛で『……自分の「知恵」に頼り、あるいは昔の開拓使関係の佐藤、調所、森らと共に「外交的手腕」に頼り、あるいは成功の「幸運」に頼らなければならない時には、僕はどんな事業にも疲れてしまう……』とも云っている。

佐藤昌介の提供した「職業と学問」の選択に於て両者は決定的に別な道を歩むことになったと考えられないだろうか。

新渡戸と内村の文通は、新渡戸がドイツ留学を経て明治24年3月31日札幌農学校教授となつてから再開されるが、その折の文通は、(書簡全集によると)明治29年に入って、1月20日、4月10日、8月2日、10月10日の4通だけであり、それ以降の文通は絶えている。その4通に於ても、内村は博士殿、教授殿、国民の正一位と書いて、新渡戸に対しての批判的な表現が伺われ、又文中には衣裳崇拜、肩書崇拜、金銭崇拜等の用語も見られる。その場合、両者の思想的分岐が米国学時以上に深まったとしなければならない。

## 結 語

以上粗雑ではあるが、文化系学問を指向しつつあった新渡戸稲造の思想的転換点の問題に若干触れてきた。新渡戸が札幌農学校教授として農学に復帰し、農業経済学科とその学問に個性の一側面が形成されたことは云うまでもないことである。もし、農業経済学を農学から出発した農業経営学と、文化科学・経済学から農業に向けられた農政学の両側面を考えるとすれば、後者の側面は、新渡戸によって、然も偶然的な要素によって導かれたと考えないわけにはゆかない。又新渡戸の思想的人生は農学(皇学)から出発して人文系学問を指向し、札幌農学校教授として農学に復帰し、明治30年札幌農学校を辞することによって、再度「人文系 humanism」を指向したとも云えよう。キリスト者としての新渡戸の社会的実践について云えば、修養克己的なものだとも云われ、また最近の新渡戸研究では、新渡戸の宗教は宗教ではなかったという観方もある。あるというのが最も明らかにその性格を示しているのではなからうか。……』

1) 『……若き新渡戸の苦闘に満ちた求道にもかかわらず、道徳的神秘主義的で

1) 宮本信之助、若き新渡戸稲造の信仰 東京女子大学新渡戸稲造研究所載。

とある。仮に新渡戸が、「モラリスト」「ヒューマニスト」に留るとするならば、クエーカーへの入信は「その帰結」であり、「その原因」とは考えられない。モラリスト、ヒューマニストとしての新渡戸は、若き日の札幌農学校に於て形成された筈だからである。当時の米国に於ける宗教傾向は、ハーバードを拠点とするユリテリアン系（理性の宗教）が多く、ために組合会衆派（コングレゲーションナル）の本拠であるアマースト・カレッジはピュリタニズムの要塞として対抗していたと云われるが、札幌農学校の図書リストには、意外にユリテリアン系の宗教書が多かったこと、クラーク帰国後の教頭であったホイラーがエマーソンの崇拜者であったことから考えて、新渡戸の思想は、札幌農学校の社会人文教科を媒介として、或いはハーバード系に近かったのかも知れない。

然し乍ら新渡戸が非宗教的要素が強かったとしても、それは内村に対してであり、単に立身出世主義者或いはテリノクラートと考えることはできないのは勿論である。またドイツ農学の輸入者としては、家郷から受けた伝統的農本主義の背景があることを考えなければならない。その点では、やや佐藤昌介の農業論（大農論）とは色彩を異にするものがあるとも考えられる。それをどのように把えるか、またそれが農学としてどこにつながるかは今後にはまたなければならない。

2) 蕙林14号, 47 p。

付表 1 (明治9年) FIRST ANNUAL  
REPORT  
COURSE OF STUDY AND INSTRU-  
TION

FRESHMAN YEAR

*First Term.*—Algebra, including Logari-  
thms, 6 hours each week; Chemical  
Physics and Inorganic Chemistry, 6  
hours; English, 6 hours; Japanese, 4  
hours; Military Drill, 2 hours; Man-  
ual Labor, 6 hours.

*Second Term.*—Geometry and Conic  
Sec-tions, 6 hours each week; Organic  
and Practical Chemistry, 8 hours;  
Agriculture, 4 hours; English, 2 hours;  
Elocution, 2 hours; Freehand and  
Geometrical Drawing, 3 hours; Mil-  
itary Drill, 2 hours; Manual Labor, 6  
hours.

付表 2 (明治11年) THIRRD ANNUAL  
REPORT

FRESHMAN YEAR

*First Term*

Algebra, including Logarithms, 6 hours  
each week.  
Chemical Physics and Inorganic chem-  
istry, 6 hours.  
Agriculture, 2 hours.  
English and Elocution, 6 hours.  
Military Drill, 2 hours.  
Manual Labor, 6 hours.

*Second Term*

Geometry and Conic Sections, 6 hours  
each week.  
Practical Chemistry, 8 hours.  
Agriculture, 4 hours.  
English and Elocution, 4 hours  
Free-hand and Geometrical Drawing, 3  
hours.  
Military Drill, 2 hours.  
Manual Labor, 6 hours.

付表 3 (明治19年) SIXTH ANNUAL  
REPORT

FRESHMAN YEAR

*First Term*

	HOURS PER WEEK
Agriculture .....	3
Chemical Physics and Inorganic Chemistry .....	6
Algebra .....	6
English .....	5
Anatomy, Physiology and Hygiene	4
Manual Labor .....	3
Military .....	2

*Second Term*

Agriculture .....	4
<u>Japanese Agriculture</u> .....	2
Organic Chemistry and Chemical Analysis.....	10
Geometry .....	4
English .....	3
Manual Labor .....	6
Military .....	2

SOPHOMORE YEAR

*First Term.*—Agricultural and Analytical

Chemistry, 8 hours each week; Botany, 3 hours; Human Anatomy and Physiology, 3 hours; English, 2 hours; Elocution, 2 hours; Agriculture, 4 hours; Military Drill, 2 hours; Manual Labor, 6 hours.

*Second Term.*—Trigonometry and Surveying,

6 hours each week; Quantitative Analytical Chemistry, 8 hours; Botany, 4 hours; Agriculture, 2 hours; English and Japanese Translations, 2 hours; Mathematical Drawing and Plotting, 3 hours; Military Drill, 2 hours; Manual Labor, 3 hours.

SOPHOMORE YEAR

*First Term*

Agricultural and Quantitative Analytical Chemistry, 8 hours each week. Botany, 3 hours. Agriculture, 4 hours. Human Anatomy and Physiology, 3 hours. English and Elocution, 4 hours. Military Drill, 2 hours. Manual Labor, 6 hours.

*Second Term*

Trigonometry and Surveying, 6 hours each week. Organic Chemistry, first half session, 6 hours. Spectrum Analysis, second half session, 6 hours. Botany, 4 hours. Agriculture, 2 hours. Mathematical Drawing and Plotting, 3 hours. Military Drill, 2 hours. Manual Labor, 3 hours.

SOPHOMORE YEAR

*First Term*

Agriculture ..... 5  
Japanese Agriculture ..... 2  
 Agricultural Chemistry and Practice 8  
 Microscopy ..... 3  
 Trigonometry and Conic Sections ... 4  
 Agricultural Book-keeping ..... 2  
 Geometrical Drawing ..... 1½  
 Manual Labor ..... 6  
 Military ..... 2

*Second Term*

Agriculture ..... 4  
 Botany ..... 6  
 Quantitative Analytical Chemistry... 4  
 Surveying ..... 4  
 Practice in Surveying ..... 3  
 Astronomy ..... 3  
 History ..... 5  
 Mathematical Drawing and Plotting 3  
 Manual Labor (Experimental.)  
 Military ..... 2

**JUNIOR YEAR**

*First Term.*—Mechanics, 6 hours each week; Zoology, 3 hours; Botany, 3 hours; Fruit Culture, 3 hours; English, 4 hours; Japanese, 2 hours; Military Drill, 2 hours; Manual Labor as required.

*Second Term.*—Astronomy and Topography, 6 hours each week; Stock and Dairy Farming, 3 hours; History of English Literature, 6 hours; Landscape Gardening 3 hours; English and Japanese Compositions and Translations, 2 hours; Military Drill, 2 hours; Mechanical and Topographical Drawing, 3 hours.

**JUNIOR YEAR**

*First Term*

Astronomy, 3 hours each week.  
 Topography, 3 hours.  
 Botany, 3 hours.  
 Fruit Culture, 3 hours.  
Zoology, 6 hours.  
 English Composition and Elocution, 1 hour.  
 Topographical Drawing, 3 hours.  
 Military Drill, 2 hours.  
 Manual Labor as required.

*Second Term*

Mechanics, 6 hours each week.  
 Agriculture, 3 hours.  
 History of English Literature, 6 hours.  
 English Composition and Elocution, 2 hours.  
 Mechanical Drawing, 3 hours.  
 Military Drill, 2 hours.  
 Practical Horticulture, 3 hours.

**JUNIOR YEAR**

*First Term*

Fruit Culture and Horticulture ..... 6  
Agricultural History and Statistics... 2  
 Botany ..... 6  
 Zoology ..... 3  
 Mechanics ..... 4  
 Topography ..... 3  
 Topographical Surveying and Drawing 6  
 Manual Labor (Experimental.)  
 Military..... 2

*Second Term*

Stock Farming, Breeding and Feeding 6  
 Geology and Mineralogy..... 5  
 Zoology and Pisciculture..... 5  
 Physics ..... 6  
 Manual Labor (Experimental.)  
 Military..... 2

SENIOR YEAR

*First Term.*—Physics, 6 hours each week ;

Veterinary Science and Practice, 6 hours each week ; Geology, 4 hours ; Book-keeping, 4 hours ; Extempore Debate, 2 hours ; Microscopy, 3 hours ; Military Drill, 2 hours.

*Second Term.*—Roads, Railroads and Hydraulic Engineering, 6 hours each week ; Mental Science, 4 hours ; Political Economy, 4 hours ; Original Declamations, 1 hour ; Military Drill, 2 hours.

SENIOR YEAR

*First Term*

Physics, 6 hours each week. Microscopy, 3 hours. Geology, 4 hours. Agriculture, 3 hours. Mental Science and Logic, 3 hours. Book-keeping, 4 hours. Extempore Debate, 2 hours. Military Drill, 2 hours. Exercises in Farm Management as directed.

*Second Term*

Civil Engineering, 6 hours each week. Political Economy, 4 hours. Veterinary Science and Practice, 6 hours. Original Declamations, 1 hour. Military Drill, 2 hours.

SENIOR YEAR

*First Term*

Home Manufacture of Agricultural Products ... 4  
Forestry ..... 1  
Economic Entomology ..... 2  
Agricultural Debate ..... 2  
Veterinary Science ..... 6  
Physics and Meteorology ..... 6  
Manual Labor (Experimental.)  
Military ..... 2

*Second Term*

Agricultural Economy and Rural Law 4  
Agriculture and Sericulture ..... 2  
Agricultural Engineering ..... 6  
Veterinary Science and Practice ..... 9  
Political Economy ..... 4  
Original Declamation ..... 1  
Farm Management as directed.  
Military ..... 2  
Graduating Essays.